

もし人類が突然、  
この地球から蒸発していなくなったら、  
残された大自然はどうなるか。  
翌日から、目に見えぬ速度で、  
枯れ始めるだろう。  
もしこの地球上で、突然  
すべてのダンサーたちがダンスすることを辞めてしまったら、  
やはり翌日から  
自然に属する人間の肉体そのものが  
枯れ始めるだろう。

僕はいまだにダンスすることに  
一抹の「恥ずかしさ」と「後ろめたさ」を感じ続けている。  
言うべきこと、言いたいことがあるならば、  
現実社会の中で、コトバを一声、発するのだ。  
だが、いまもって舞台上の「沈黙のダンス」に  
僕は加担し続けている。  
一体、ダンスは根源のコトバになるのか。  
新しい大自然を創造するのか。

ローマに天使城(サンタンジエロ)  
という城がある。  
かつては政治犯の牢獄であり、  
マニエリスムの絵画の収集宝庫でもあった。  
フランス革命の後、ローマにやってきた  
カリオストロは  
イタリア革命を画策中  
逮捕されて天使城に幽閉される。  
一七八九年十二月のこと。  
それからスイスのサン・レオの独房に移され  
一七九五年に死んだ。

カリオストロが夢見たのは  
政治的革命ではない。  
ダンスが人間に自由をもたらすことを、  
ダンスが自然界と人間を「友情」で  
結びつけてくれるということを、  
ダンスが根源のコトバとなることを、である。

構成・演出・振付…笠井叡

笠井叡新作 天使館ポスト舞踏公演

## 牢獄天使城でカリオストロが見た夢

—— 天使館を通り過ぎ、遠く離れていったダンサーたちが今此処に ——

2022年  
3月3日(木) 19:00 開演  
3月4日(金) 19:00 開演  
3月5日(土) 14:00 開演  
3月6日(日) 14:00 開演  
\* 開場は開演の30分前

世田谷パトリアンシアター

チケット・全席指定  
一般 前売 A席 5,000円 B席 4,000円  
当日 A席 5,500円 B席 4,500円



# 牢獄天使城でカリオストロが見た夢 ―― 天使館を通り過ぎ、遠く離れていたダンサーたちが今此处に ――

ダンスとは、鏡に映った自分の鏡像に生命を流し込む作業のこと。

カラダの中でいろいろ考えを巡らしている時、そのコトバは外にいる人間には聞こえない。もしカラダの中で考えたコトバが、その瞬間に、外に聞こえるならば、人間関係は崩壊するであろうか。

崩壊するともいえるし、人間関係がその瞬間に成就するともいえる。

目の前にいる人間に対して「**「「」**は「この世に、いない方がいいのではないか？」

という思考内容がそのまま外に聞こえるならば、

もはや会話の必要性はなくなる。

しかし実際、そのようなカラダ内部のコトバの「完全な公開性」によって人間関係が成り立っている世界があるとするとならば、

それは死者たちの世界ではないか。

一ヶ月前に、ひとりの友人が死んだ。

それまで僕の外にいたその友人は、もはや会話できるよう外にはなく僕の心に住み始める。

この時、僕の心内部に響いている声は、その瞬間にその友人に聞ことられる。友人の考えもその瞬間、友人の声として、僕の心の中に流れ込んでくる。

完璧な人間関係を、もし「この世で」、単純に創りたいと思うなら、

ダンスするしかない。

動きは、頭部の中で語られている思考内容のように

隠匿することはできない。

ダンスにおいて「動き」とは、公開された人間内部の「声」である。

だから皆「ダンスを観る」。

ダンスにおいては隠匿されている「動き」が、すべて公開される。

一方で、観客はダンサーが、無意識の内に隠匿できると思っている「内なる動き」をすべて「盗み見る」ことができる。

毎夜、劇場に通う観客がいる。

そのような人にとって今日、「ダンス技術」よりも「盗み観る技術」のほうがはるかに進化している。

そして「踊る」よりも「観る」方が、はるかに重要な意味を持つところ。

ダンスの主体がダンサーから観客へ移りつつある。

しかし、ダンサーがこの「公開された隠匿性」を観客から再び引き戻すことなく、ダンスの主体が他者に受け取られた状態であり続けるならば、

その瞬間から緩やかに、ダンスはダンスのひとつの存在理由を失い始める。

なぜなら「ダンス」と「ダンス作品」は同一の地平には立ててはいない。

「作品」とは新たな「隠匿性」の創造なのである。

そして観る側に移動していったダンスの主体を

再びダンサーが舞台上へ引き戻し、

作品として

新しい「隠匿性」を創造しなければならない。

その時、再び観客は前掲なしに、霧から

新たにダンスを観ることを始める。

ヨハネ福音書の有名な冒頭の言葉

太初にコトバあり

コトバは神と共にあり

コトバは神なりき

この冒頭の「太初」はギリシャ語からのドイツ語訳では「Urbeginn（ウルベギンネン）」と記されたいる。

この「ウルベギンネ」とは、「単に抽象的な一もの始まり」という意味ではない。

「ウルベギンネ」とはひとりの人間である。

始まりと「つ」に結びついている人間存在である。

世界とは「ウルベギンネ」という

全世界を内包した人間がコトバを発することに

創造される。

この人間のコトバは声とダンスとが

一体となって発声される。

この言葉はどこにも隠匿されることなく発声と同時にすべて公開される。

原人原は声を発する、同時に、原人間はそれを聴く。

人間の中で同時に起るこの「発声と聴覚の結合」によって

世界は創造される。

そのコトバは太初に神とともにあり

よろずのもの、これによりて成り、

成りたるもの、これによりて成り、

これによりて成りたるはなし

原人間の世界創造は「公開された隠匿性」としての発声とその声を同時に「聴く」という、

創造行為を創造作品に帰する、新たな「隠匿性」によって成り立っている。

旧約聖書における創世記では、神が様々な自然を創造しているとき、

最後に神は常にそれを見て「善（よし）」と「言えり」という言葉が続く。

「善（よし）」とは、

声によって創造された大自然界を一つの創造作品として

新たな隠匿性に変える「聴く」動きなのである。

からだとは創造された作品なのである。

だからダンス以前の人体それ自体は、「隠匿性の結晶体」である。

声は声の中から生じるのではなく、沈黙の「無」の中から生じる。

「無」が「有」に変わることによって、カラダは創造される。

創造のための、「一切の前提過程なしに」「無」が「有」に変わる。

ダンスでいうなら、「プレパレーション」という前提運動なしに突然、

「動き」が生じる。

前提的運動を「動き」とみせずならば、

その「動き」を生み出すための、さらなる「前提的動き」を想定しなければならない。

この連鎖は無限に続く、無限の前提的創造の中から生まれるではなくて

突然「無」の中から生じる。

この「無」は「不在」ではなく、「鏡像」である。

「存在」の反対概念は「不在」ではなくて「鏡像」である。

創造とはただ「鏡像が実像になる」ということによって生じる。

「イメージ」という「鏡像」が「実像」になることによって生じる。

だから次のように記すことができる。

太初に鏡像あり

鏡像は人間なりき

よろずのもの鏡像によりて成り

成りたるもの、これによりて成りたるはなし。

原人間が鉱物植物動物という大自然界と人体を創造する時、

太初に鏡像があった。

原人間は世界の端で世界を取り囲んでいる鏡像の壁に

みずからの姿を映し出す。世界が創られる。

声が鏡像に働きかけると鏡像は実像に変わる。

声が鏡像の人体から実体を生み出す。

「秘すればは鏡像」

「秘すればは花」

原人間の

世界創造は「公開された隠匿性」としての発声と

その声を同時に「聴く」という、

創造行為を創造作品に帰する、新たな「隠匿性」によって成り立っている。

旧約聖書における創世記では、神が様々な自然を創造しているとき、

最後に神は常にそれを見て「善（よし）」と「言えり」という言葉が続く。

「善（よし）」とは、

声によって創造された大自然界を一つの創造作品として

新たな隠匿性に変える「聴く」動きなのである。

からだとは創造された作品なのである。

だからダンス以前の人体それ自体は、「隠匿性の結晶体」である。

声は声の中から生じるのではなく、沈黙の「無」の中から生じる。

「無」が「有」に変わることによって、カラダは創造される。

創造のための、「一切の前提過程なしに」「無」が「有」に変わる。

ダンスでいうなら、「プレパレーション」という前提運動なしに突然、

「動き」が生じる。

前提的運動を「動き」とみせずならば、

その「動き」を生み出すための、さらなる「前提的動き」を想定しなければならない。

この連鎖は無限に続く、無限の前提的創造の中から生まれるではなくて

突然「無」の中から生じる。

この「無」は「不在」ではなく、「鏡像」である。

「存在」の反対概念は「不在」ではなくて「鏡像」である。

創造とはただ「鏡像が実像になる」ということによって生じる。

「イメージ」という「鏡像」が「実像」になることによって生じる。

だから次のように記すことができる。

太初に鏡像あり

鏡像は人間なりき

よろずのもの鏡像によりて成り

成りたるもの、これによりて成りたるはなし。

原人間が鉱物植物動物という大自然界と人体を創造する時、

太初に鏡像があった。

原人間は世界の端で世界を取り囲んでいる鏡像の壁に

みずからの姿を映し出す。世界が創られる。

声が鏡像に働きかけると鏡像は実像に変わる。

声が鏡像の人体から実体を生み出す。

「秘すればは鏡像」

「秘すればは花」

1973年美術手帖9月号「天使館七つの封印」より（市川雅）

天使館の舞者は自己の肉体を引き受けつ、物質としての肉から霊への回路を直通していくのだろう。舞踏することは肉の生理を反転して反生理に行きつくことである。前もってする振付は肉を理性に従属させ温和な表情をもたせてしまうのだろう。肉体は理性の反映でしかなく、兼役として横行するだけに過ぎなくなる。肉体は意識を踊ることを停止し、肉体の自動記述による舞踏に移行する時、理性からの解放が現実化する。だが同時にまた肉の生理を反生理に転移させるために、肉を解放させねばならないだろう。ここで肉体は錯乱を余儀なくされるのだ。物質としての肉体と意識の呪縛から脱れ去るには、それぞれの論理からはずれてしまうことさえ必要なのである。錯乱とは支配から脱れ得る唯一の道かもしれない。錯乱を肉のアンキズムと名付けてもよい。少なくとも、肉の生理と理性の支配は錯乱を通して影を消し、錯乱の真只中から錯乱によってしか得られない観念が浮上してくる。

いくつかの例をあげてもよい。笠井がたびたびこらえているいくつかの変身。私が見た時は魔女から、聖女そしてよくわからぬがより進化レレクシオンへと変身していった。変身はたがいに登場人物の肉体を裏切り、肉体の迷宮を形成していく。変身の激しさは最終的には登場人物のアイデンティティを崩壊させ、混沌のなかに溶解してしまう。あるいは、アンドロギュナス的登場人物は、ある数少ない仕種によっても男と見えたり、女に見えたりして視覚を攪乱し、性的一貫性を消失せしめよう。錯乱に形式があるとすればもうした型で現われくることが、そこに見られるものは現実に見られる肉の生理ではなく、反生理の観念なのである。変身という肉体の次元に立ちいたると、肉体は他の肉体を喰いつくしながら交感し合うのだろう。乱脈、狂気という古典パレエのもつているシステムの多くは生理に逆らう性質のもので、ひどく無理な変態を要求している。

ヴォリンスキー、ツハリアヌなどがそこに宇宙的アンシオリズムを産出したのは、パレ自身が肉体を錯乱させることによって至高な観念の高みにいたるシステムを持っているからであるヴォリンスキーなどパレエにおける肉体をミクロコスモスと断定したもののためだ。だが、パレエは宇宙のシンボリズムとして成立しとしても、エロチンズム―すなわち性的錯乱によって物質としての肉体を壊滅させることに不足している。肉体を技術の倒錯だけでなく、エロチンズムの極点において錯乱させたのは笠井がはじめてではなかっただろうか。

天使館は舞踏集団であるというより、今や個の自覚による位置更新を自ざしている之間。だんだんと舞踊家であることから遠ざかり、肉体を注視する思想集団になりつつあるようだ。それとともに、イメージ主義から離れていくのだろう。かつての暗黒舞踏派が土俗的であるという点でリアリティを失ちえ、そしてまた過剰とも思えるシュールリアリスティックなイメージを持つていたのに比較すると、なんという相違であらう。舞は芸術として奉仕しなければならないのだろうかという設問は重大である。観客に奉仕するはイメージの繁華またはイメージの故意の真贋を「アブストラクトパレエを見よ」が必要であるに違いない。だが、天使館の舞踏会には振付はないし、ことさらに演出もなく、ただ個人の錯乱の軌跡を残すのみなのである。ここでは様相が一変していることを再度確認しなければならない。舞者は即興で踊っているが、呪縛に対して即興性を強調しているわけではない。即興音楽、即興舞踊の類ではなく、彼らにとって即興とは意識と肉体の相互非依存性ともいうべき、錯乱の様態なのである。反イメージ主義といっても、観客にとってはイメージと追従否定のほうが大きく浮かび上がっているのだ。天使館は舞踏に接近しながら、遠ざかっている。接近と遠隔のアンドロギュナスというべきだろうか。

### 笠井勲

### 山崎広太

### 齋田美子

### 櫻井郁也

### 定方まこと

### 笠井禮示

### 原仁美

### 寺崎礁

### 【構成・演出・振付】

#### 笠井勲

### 【出演】

#### 浅見裕子

#### 上村なおか

#### 大森政秀

#### 笠井久子

#### 笠井瑞丈

#### 笠井禮示

#### 鯨井謙太

#### 齋田美子

#### 櫻井郁也

#### 定方まこと

#### 杉田文作

#### 寺崎礁

#### 野口泉

#### 原仁美

#### 山崎広太

#### 山田せつ子

#### ・

#### 笠井勲

### 【ピアノ演奏】

#### 島岡多恵子

### 笠井勲渡独までの天使館小史

1963年10月「箏篋」朝日講堂（duo 大野一雄）
1966年8月23日「[[[刑聖母]]]（處女リサイクル）銀座ガスホール（大野一雄・高井富子協力出演）
1967年5月11日「[[[嬢の物語]]]」（ダンスエキシビジョン solo）都市センターホール
1967年10月30日「[[[舞踏への招宴]]]」（独舞リサイクル）第一生命ホール
1968年8月30日「[[[稚児之草子]]]」（独舞リサイクル）新宿厚生年金会館
1969年6月「[[[タンホイザー I]]]」（独舞リサイクル）厚生年金会館小劇場
1971年4月 天使館設立
10月「[[[丘の麓]]] 現代舞踊の異形公演」（共演 大野一雄）
1972年1月「[[[タンホイザー II]]]」（独舞リサイクル）厚生年金会館小劇場
8月「[[[三つの秘蹟のための舞踏会]]]」（天使館舞踏公演）厚生年金会館小劇場
1973年6月30日～9月30日（土・日）「[[[七つの封印]]]」（天使館舞踏公演）赤坂国際芸術家センター
1974年7月「[[[天照大御神への鎮魂の舞ひ]]]」（独舞リサイクル）赤坂国際芸術家センター
10月「[[[伝授の門]]]—現代における秘儀とは何か—」（天使館公演・講演高橋巖）
1976年1月10日「[[[月読蛭子]]]」（独舞リサイクル）第一生命ホール
3月9日「[[[トリストアンとイゾルデ]]] 九段会館（共演 笠井久子・堀内博子）
9月7日「[[[個的秘儀としての聖霊舞踏のために]]]」（独舞リサイクル）第一生命ホール
12月22日「[[[物質の未来]]]」（独舞リサイクル）第一生命ホール
1977年4月14日「[[[龍の姿をした愛欲の母なるティアマト]]]」（独舞リサイクル）朝日生命ホール
7月1日「[[[冥王の妃ティアマト]]]」（独舞リサイクル）朝日生命ホール
1978年1月～8月「[[[エーテル宇宙誌]]]」（連続舞踏公演 solo）天使館・朝日生命ホール
1979年1月17日「[[[悲惨物語]]]」（舞踏作品集 I solo）第一生命ホール
3月6日「[[[ソドム百二十日]]]」（舞踏作品集 II）第一生命ホール
5月1日「[[[死美人]]]」（舞踏作品集III II）第一生命ホール

### 笠井久子

## 2022年3月3日（木）19:00 開演

## 4日（金）19:00 開演

## 5日（土）14:00 開演

## 6日（日）14:00 開演

## \* 開場は開演の 30 分前

## 世田谷パブリックシアター

アクセス
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 TEL:03-5432-1526
三軒茶屋駅（東急田園都市線（渋谷より2駅・5分）・世田谷線）より直結

### チケット料金

### 全席指定・税込

### A席（1・2階席） B席（3階席）

一般 前売 A席 5,000円 B席 4,000円／当日 A席 5,500円 B席 4,500円

学生割引 前売 A席 3,500円／当日 4,000円

### 世田谷パブリックシアター友の会 A席 4,700円（前売のみ）

せたがやアートカード会員\*1 A席 4,800円（前売のみ）

U24\*2 A席 4,000円（前売のみ）

<sup>[</sup>\*1: 世田谷区在住の方対象。詳細・お申込みは世田谷パブリックシアターチケットセンター、または劇場公式サイトへ。（要事前登録）
<sup>[</sup>\*2: 18～24歳の方は世田谷パブリックシアター主催公演の前売チケットが半額になるほか、主催以外の一部公演についても割引料金でお求めになります。
詳細・お申込みは世田谷パブリックシアターチケットセンター、または劇場公式サイトへ。このサービスはトヨタ自動車株式会社が提供しています。（要事前登録）

<sup>[</sup>\*学生券・U24チケットをお求めの方は、当日、証明書をご提示ください。
<sup>[</sup>\*未就学児童の入場はご遠慮いただいております。

### チケット取扱

●世田谷パブリックシアターチケットセンター TEL：03-5432-1515（10:00～19:00）

●世田谷パブリックシアター オンラインチケット https://setagaya-pt.jp/（24時間受付・要事前登録）

※電話およびオンラインのみでの受付となり、窓口での発売・発券はございません。

お支払方法は「セブン-イレブン」または「オンラインクレジットカード決済」、お引き取り方法は「セブン-イレブン発券のみ」となります。

●e+（イープラス） https://eplus.jp/sf/detail/3555820001-P0030001

車いすスペース（定員あり・要予約、ご利用希望日の前日19:00まで）

料金：一般 A席より10%割引（付添者は1名まで無料）

申込：世田谷パブリックシアターチケットセンター TEL:03-5432-1515

託児サービス（定員あり・要予約、ご利用希望日の3日前正午まで）

料金：2,200円（1名につき）

対象：生後6ヶ月以上9歳未満（障害のあるお子様についてはご相談ください）

申込：世田谷パブリックシアター TEL:03-5432-1526

### 【お問合せ】

ハイウッド

TEL:03-6302-0715（平日11:00～18:00） E-mail:hiwood.info@gmail.com

【新型コロナウイルス感染症拡大予防のためのご理解とご協力をお願い】

- 当公演は新型コロナウイルス感染症拡大防止に関する取り組みを講じた上で開催いたします。
- ご来場の際には必ずマスクをご着用の上、館内での検温・手指消毒等にご協力ください。（37.5℃以上の発熱がある方は、入館できません。）
- 入場時、チケットの半券はお客様ご自身でお切りいただき、所定の場所にお入れください。
- 劇場内での混雑を避けるため、入退場時に制限を行う場合があります。
- 感染症対策のため、お客様の購入時のご連絡先を保健所などの公的機関に提供する場合があります。
- 劇場HPに掲載の新型コロナウイルス感染症拡大予防ガイドラインをお読みいただき、ご了解の上、ご来場ください。

### 笠井瑞丈

### 上村なおか

### 浅見裕子

### 鯨井謙太

### 野口泉

照明／森下泰

音楽制作／角田寛生

音響／稲荷森健

衣裳／萩野緑

舞台監督／河内崇 湯山千景

宣伝写真／笠井爾示